

小学校英語教科書におけるユニバーサルデザイン ～文字指導に焦点を当てて～

An Overview on Universal Design of English Textbooks Used in Primary Schools: Focusing on Writing English Letters

小野 祥康*

ONO, Yoshiyasu

概要

2020年度より小学校高学年で外国語科の指導が始まり、英語の文字を正しく書いたり、簡単な語句や基本的な表現を書き写したりする指導が本格化していることから、効果的な文字指導の在り方を探ることがますます重要になっている。また、ユニバーサルデザインの観点から、どの児童も安心して英語学習に取り組めるよう工夫することも求められており、小学校外国語科の教科書においては、ユニバーサルデザイン書体が採用されたり、いわゆる「四線」についてもいくつかの工夫がなされたりしている。本稿では、英語学習における「書くこと」のつまずきについて、学習障害における文字指導の研究と、いわゆる通常級の児童を対象とした文字指導における研究を概観・整理するとともに、具体的にそれらの知見が教科書の中にどう反映されているかを考察する。

1. はじめに

小学校高学年で「教科」としての外国語（英語）指導がスタートした。7社の検定教科書がそれぞれの地域で採択され、各小学校で使用されているわけだが、入門期の英語の指導を充実させるべく、これまでの研究の知見を生かして様々な工夫がなされている。そのひとつが、小学校におけるアルファベットや単語の指導に対する配慮である。

英語学習の入門期では、よく起こるエラーのひとつである“b”と“d”の指導や、中学校1年生の教科書の途中からフォントが変わることで、特に“a”や“g”の字体をどのように扱うか指導に苦心するところである。現在、小学校では算数の教科書に出てくるアルファベットや理科の重さの単位なども、フォントの配慮がなされていることから、当然英語の教科書においても何らかの配慮が必要になる。そこで注目されるのは、小学校英語の教科書におけるユニバーサルデザイン（以下、UD）である。

UD自体の定義は広義であるが、授業におけるUDの定義として非常に分かりやすいのは、「必要な子どもには「ないと困る」支援であり、どの子どもにも「あると便利」な支援」（佐藤慎二，2008；花熊，

2011など）であろう。

佐藤克敏（2015）は、授業におけるUDの先行研究には、特別支援教育の観点からの研究と、各教科教育の専門性や授業が出発点の研究の2つの系統があり、授業におけるUDの定義はまだ整理・確立されていないと述べている。したがって、両方の観点からの検討が必要不可欠であるとの指摘もある（花熊，2011）。

中でも、英語はディスレクシア（識字障害）の現れやすい言語であり、英語教育ではUDの観点を取り入れることが重要である（村上，2019；板垣，2020など）という考えから、英語授業におけるUDの研究は近年急速に進んでいる。学会として「英語授業UD学会」が立ち上げられるなど、それまでの研究の知見を整理したり、特に学習者の英語の読み書きについては、つまずきへの具体的な指導法や対応策も検討されたりするなどしている（村上，2018，2019；竹田ら，2020など）。

本稿では、英語の文字を書くことについて、特別支援教育の観点からの先行研究と英語教育・授業が出発点の先行研究を概観するとともに、具体的に教科書の中で生かされている知見を考察する。

2. 先行研究

授業におけるUDの研究は、前項で述べた通り、特別支援教育の観点からの研究と各教科教育の専門性を踏まえた研究がある。英語の文字を書くことについての研究も、やはり学習障害（以下、LD）やその近接領域にある児童生徒を対象にした研究といわゆる通常級におけるものがあるようだが、本項ではこれらの先行研究を概観する。

2.1 英語の文字を書くことの研究(1)～特別支援教育の観点から～

まずは、特別支援教育の観点から、LD傾向の学習者を対象にして英語の文字の指導事例を報告した研究を紹介する。

平井・深谷（1999）は、LD児（小学校高学年・中学生）3名の傾向について報告している。これによると、大文字の“J”や小文字の“j”，大文字の“N”“S”といった文字の「鏡文字」、あるいはアルファベット順に近接する“L”“M”“N”の混同が見られたとしている。こうしたことから、フォントの問題が原因の一つとしてあるのではないかということ、また、どのタイプの子にはどの活動や指導法が向いているかを調べるのが重要であると述べている。

牧野・宮本（2002）は、中学生LD児の英語の読み書きについての指導事例を3例紹介している。その中で、鏡文字“b”“d”の習得に時間がかかったこと（中には指導後にほぼ誤りが消失した例もある）などを報告した上で、LDに特徴的な誤りとは必ずしも言えないという前置きをしつつ、誤りの特徴は調査対象である当該児童の認知特徴や学習方略を反映しているのではないかということ、また、英語ということだけではなく、日本語及び英語にまたがる言語習得の特徴についても考慮していかなければならないと結論付けている。

また、平井・石川（2005）は、通常級ではあるが軽度の発達障害をもつ小学校6年生の児童1名に対する指導事例を紹介している。書字に対して強い拒絶反応があったこと、字を書いてもバランスを欠いた字を書くこと、鏡文字や似たような音・形のアルファベットを混同することなどを挙げ、23回の指導で大文字はほぼ習得したが、特に小文字の習得に困難が見られたことなどを報告している。

こうした調査結果などを踏まえ、特別支援教育士（S.E.N.S）を育成するセミナーのテキストでは、英

語の文字の読み書きについて、小文字のほうが形態的に弁別が難しいため、書くときに“b・d”“p・q”などで混乱が生じやすいこと、また書く時にもルールとして四線のどの位置に書くかが文字ごとに決まっいて、書く位置の誤りが生じやすいのではないかと指摘している（山田、2018）。

以上、特別支援教育の観点から、英語の文字を書くことについての研究を概観してきたが、いわゆるLD傾向の学習者が共通して抱えているつまづきについて、「鏡文字」「フォント」「特に小文字の難しさ」「四線」「音や形の類似」「アルファベット順」そして「認知特徴・学習方略」といったキーワードとしてまとめられるのではないかと考える。

2.2 英語の文字を書くことの研究(2)～英語教育・授業が出発点の研究～

次に、英語教育の専門性やいわゆる通常級における英語の授業といった観点からの研究を概観する。

酒井・小林・滝沢・伊東（2018）は、英語の文字に関するそれまでの研究が極めて少ないとしながらも、先行研究について紹介し、その調査方法や特徴、分析の結果や問題点などについて詳細に報告しており（表1）、その上で小学校6年生を対象に、四線に正しく、大文字と小文字をアルファベット順に書く課題に取り組ませた。その結果、大文字は“N”“M”“J”“L”の正答率が低かったこと、小文字については“q”“l”“j”の正答率が低かったことを挙げている。考察としては、これらは文字の大きさ、長さ、配置の誤りなどによるものであることや、大文字に比べて小文字が難しかったこと（特に子音字）、逆に母音字の正答率は高かったこと、“L”“M”“N”などの混同は音が似ており、アルファベット順に近いことが原因であると指摘している。また小文字“b”“d”など形の似ているものの混同もあったとしている。この結果を踏まえ、教育的示唆として、主に①文字の音を正しく認識したり、アルファベットの順番を覚えたりすることを促進する指導、②大文字と小文字の区別を明確にする指導、③四線の上の配置を意識した指導、の3点を指導することが重要であると述べている。

また、兼重・藤井・瀧本・梅本・小笠原（2020）は、小学校6年生を対象に、覚えているアルファベット（大文字・小文字）を書くこと、聞こえたアルファベットを書くこと（大文字・小文字）、バラバラに並べられた語句を正しい語順で書き写すこと、例

表1 英語の文字を書くことについての先行研究（酒井ら，2018によるものを基に筆者が表を作成）

Ames and Ilg (1951)	<ul style="list-style-type: none"> ・母語話者の幼児の「書くこと」の習得 ・4歳 丸い文字 (G, G, O, Q) 縦横 (E, H, I, L) ・5歳 Sの鏡文字 ※8歳までに見られなくなる
Sassoon (1995)	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な母語の英語学習者による手書き文字の特徴 ・中国語話者の書く英語の文字のストロークに注目 ・フォント (Sassoon Sans Slope) を開発 ・「子ども向けの書体として幅広く使用されている」: 手島 (2019)
村野・天野 (1972)	<ul style="list-style-type: none"> ・5~6歳の幼児 ・大文字を見せて音の確認をしたあと、自分の読める文字を書く ・大文字の“J” “F” “L” “R” でエラーが多かった
アレン玉井 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校5・6年生 ・10種類の大文字 (“A” “B” “J” “K” “L” “M” “N” “O” “R” “W”) ・“R” が書けない “J” の鏡文字 ※日本語の「し」が干渉?
国立教育政策 研究所 (2009)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校5・6年生 ・読まれた英語の文字を書く (大文字 “F” “D” “A” “G” “M” 小文字 “e” “r” “h” “t” “l”) ・音声の似ているもの ※ “D” と読まれたのに “T” を書いた ・“D” の鏡文字 ・i と l など形の似ているものの混同 ・特に小文字が難しい
石濱 (2016)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校5・6年生 ・読まれた英語の文字を書く (“Dd” “Ii” “Jj” “Pp” “Rr”) ・大文字小文字をすべて書くテスト ・“J” “j” “q” の正答率が低かった

文を参考にして自分のことについて書くことを課した。その結果、小文字の正答数が大文字と比較して少なかったこと、大文字でも“J” “N” “Z”などの鏡文字が見られたこと、音声的要因や形態的要因による誤答が見られこの傾向は大文字にも小文字にも見られたことなどを挙げ、教育的示唆として、アルファベットの指導では文字ごとに指導の工夫をする必要があることなどを挙げている。

以上のことから、いわゆる通常級の児童への文字指導において、書くことのみならず読み書きについてのキーワードとして、「鏡文字」「フォント」「特に小文字の難しさ」「四線」「音や形の類似」「アルファベット順」が挙げられるのではないかと考える。これらのキーワードは、特別支援教育の観点からの研究とほぼ同じものであるが、「認知特徴・学習方略」といった視点には特に見つけられなかった。

2.3 英語の文字を書くことの研究(3)～英語UDの研究～

特別支援教育と英語教育の観点から先行研究を概観してきたが、近年、特に小学校で外国語教育が導入されるようになってから、入門期である小学校において「英語嫌い」をつくらないため、そしてつまづきをできるだけ取り除く指導の工夫が検討されてきており、主にUDの観点から、英語授業における文字の読み書きのつまづきに対して、具体的な対応策や指導方法などを紹介する書籍が増えている(村上, 2018, 2019; 竹田ら, 2020など)。

フォントの問題についても、例えば手島(2019)は、鉛筆を上にあげる回数が少なく、なるべく「一筆書き」ができるような書体、筆順や運筆に沿った書体の採用が重要であると提案している。また、イギリスのサセックス大学の研究を基に開発されたCrossbow Education『ビジュアルストレスアセスメ

ント』のガイドブック⁽²⁾では、文字を見やすくするために、文字を右に3%程度傾けることを推奨している。

他にも、ワーキングメモリや認知機能といった視点から「多感覚」を用いたシンセティック・フォニックス（湯澤正通・湯澤美紀，2017；湯澤美紀・湯澤正通・山下，2017）や、英語学習と認知トレーニングを合わせた指導法（宮口・正頭，2020）などの書籍も出ている。

このように、英語教育におけるUDの視点から様々な指導法や工夫が提案されている中、2020年度から使用されている小学校外国語（英語）科の教科書では、すべての会社の教科書にUDの専門家がかかわっており、特に英語の文字の読み書きについての知見が生かされている。次の項ではこれらについて考察していく。

3. 小学校英語教科書におけるUDの観点での工夫

小学校学習指導要領外国語科解説（文部科学省，2017）では、英語の文字を正しく書いたり、簡単な語句や基本的な表現を書き写したりする指導をすることや、英語の大文字・小文字を四線上に活字体で正しく書けるように指導することが挙げられている。本項では、先行研究も踏まえ、教科書における工夫について、①教科書のフォント、②四線の工夫の2点を中心に整理する。なお、これら2つの工夫については、移行措置期間に使用できるよう文部科学省が発行した指導教材『Let's Try!』や『We Can!』からすでに採用されている。

3.1 「UD欧文書体」の採用

小学校英語の教科書では、UD欧文書体が採用されている。これは「文字のかたちがわかりやすいこと」「読みまちがえにくいこと」「文章が読みやすいこと」を目的に、筆者が確認したところでは少なくともA社とB社の2社がそれぞれ開発したものであり、このうちA社のUD欧文書体については、特にディスレクシアの子どもへの識字には有効であることが示されている（朱・高田・影浦，2020）。

こうしたUD欧文書体は7社全ての教科書で採用されているが、使用量・使用率、使用されている箇所は異なるようである。例えば、筆者が単独でカウントしたものはあるが、C社の5年生用の教科書は全体の欧文書体のうち75.8%がUD書体であったのに対し、D社では95.0%であった。おそらく編集

方針にもよってこうした違いが出ているものと思われるが、教科書のタイトルやアルファベット文字のほとんどをUD書体としているものもあれば、書いたり書き写したりするために必要な箇所のみをUD書体としている場合もあった。

3.2 四線の工夫

これまでの四線は等間隔だったが、UD研究の知見からこの比率が変更されており、第2線と第3線の間が広くとられている。文部科学省の指導教材は「5:9:5」であったが、教科書会社のホームページや編修趣意書などに記載のあるもので言えば、E社とF社は「5:6:5」、G社は「4:5:4」など教科書によって若干異なっている。前述の兼重・藤井・瀧本・梅本・小笠原（2020）では、調査の際に、従来の等間隔の四線と「5:9:5」の四線のどちらを使ってもよいとし、その使用感についても簡単なアンケートを取ったところ、特に小文字においては、「5:9:5」を好む傾向にあったと報告している。

また、ベースラインはこれまでは赤色のものが多かったが、目への刺激がより少ないとされる青色が全社で採用されている。

3.3 ワークシートの作成などにおける活用

教科書については、以上のような工夫がなされているが、市販のワークブックやペンマンシップでは、フォントも等間隔ではない四線も、まだそれほど採用が多くないと見られる。

また、小学校現場の教員がワークシートなどを作成する場合について、すでに文部科学省の指導教材からフォントが配付されているが、フォントの制作会社により、UD書体にテキストボックスで四線を重ねるものと、フォント自体に四線が組み込まれているものがある。著作権の関係から、一般ユーザーはフォントを購入しなければならない。

その他、ネット上からフリーでダウンロードできる「四線付き書体」も存在するが、これらは四線ではなく「三線」であったり（一番下の線がない）、またフォントや線の間隔についても、必ずしもUDを考慮したものではなかったりする。

4. 指導に当たって

以上、小学校英語の教科書におけるUDの観点から、フォントと四線の2つの工夫を考察してきたが、こうした工夫により、先行研究におけるつまづきの

キーワードとして挙げた「鏡文字」「フォント」「特に小文字の難しさ」「四線」「音や形の類似」「アルファベット順」「認知特徴・学習方略」などが少しでも軽減し、そしてそれらが必要な子どもには「ないと困る」支援であり、どの子どもにも「あると便利」な支援になっているかどうか、さらに検証していく必要がある。

これらの工夫に加えて、フォニックスを踏まえた指導の工夫や、アルファベット順ではない教え方（手島，2019；アレン玉井，2019）、また特別支援教育では「多感覚指導」という方法も注目されていることから、どのように組み合わせて指導していくか、研究を積み上げていくことも必要である。

また、英語の文字を書き写す指導を行う際には、書き写すための「見本」がどこにあるかという問題もある。粕谷（2019）は、黒板の文字や教室の前に置かれたデジタル教科書の画面の中の文字を書き写すことで文字が脱落しやすいことや、左から右に書き写すことへのハードルの高い児童もいると指摘している。このことから、例えば、ノートなど書き写すスペースに近いところ、かつ上に見本となる文字を置くことや、板書よりもワークシート、タブレット上で見本を示すことのほうが効果的であることも考えられる。

5. 中学校の教科書におけるUDの観点での工夫

最後に、中学校への円滑な接続といった視点であるが、2021年度から使用される教科書において、3章で述べたようなUD書体の使用や四線の工夫が見られるかどうかについて、各社の教科書を閲覧したところ、全ての教科書でUD書体の使用や四線の工夫（第2線と第3線の間を広くとっていること、ベースラインが青色であること）が確認できた。しかし、やはり教科書によってUD書体の使用率や使われている場所・意図が異なるようである。

例えば、中1の教科書のみUD書体を採用しているものもあれば、中1の最初の3~4つのLessonのみUD書体が使用され、そのあとはフォントが変わっているものもある。また、中2と中3の教科書では、どの会社においてもほとんどがUD書体を使用していないが、一部のActivityやいわゆる見本のスピーチ文などで使用されているものもあった。

いずれにしても、小学校の教科書におけるUDの観点からの工夫を踏まえて指導していきたいものである。

6. 今後の研究の方向性

英語授業に関するUD研究は比較的新しい分野であり、特別支援教育における先行研究と英語教育や授業を出発点にした先行研究の両方を取り扱っている文献もまだ少ないように見受けられることから、今後はさらに両方の観点からの研究が進んでいくものと思われる。

そうした中、LDの研究に関する著作や論文の中では、四線の第2線と第3線の間だけ色をつけること、つまりハイライトを入れることが、とりわけディスレクシアをもつ児童に対して有効な手段であることが紹介されている（大谷，2017；村上，2019；品川，2020など）。

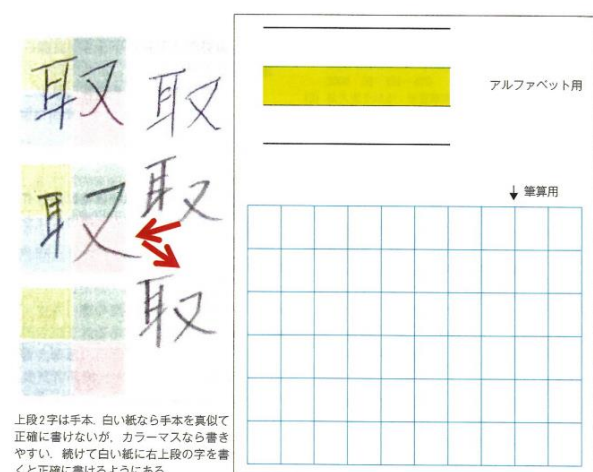
視覚認知処理が弱かったり複数の視覚情報を同時に処理することが困難だったりする特性をもつ児童に効果があるということで、実際にインターネット上でも海外のサイトに黄色やピンク、水色などのハイライトのあるものを見つけることができる。

しかしながら、国内の英語教材でハイライトのある四線を採用しているものはあまり見当たらず、筆者が調べた中では、学校や学習塾、家庭教師向けの教材で、黄色のハイライトが入っているものが1社、薄い水色のハイライトが1社、また、教科書でも7社のうちの1社のみが、巻末にアルファベットを正しく書く活動のページにおいて、グレーのハイライトのある四線を採用しているだけである。

おそらく、その効果が限定的な可能性があることや、必要に応じて指導者がプリントにマーカーを引けばよいといったことから、それほど研究が進んでいないものとも考えられる。しかし、UDの観点からすれば、こうした工夫が他の児童にも「あると便利」な支援にならないだろうか。

医学的な研究に目を移せば、脇口（2011，2018，2020）は、ディスレクシア児童のひらがなや漢字の字形の改善に有効な「カラーマス」（図1 商標登録済⁽³⁾）を開発している。2×2マスに4種類のパステルカラーを配し、色と線を意識しながら正確に書き写すことが可能になっており、練習を重ねることで字形が改善されたと報告している。その中には、アルファベットの字形の改善に有効な工夫として、やはり第2線と第3線の間を黄色のハイライトのある四線も紹介されている。また、色のコントラストは、個人の特性によって変える必要があるとも指摘している。

図1 「カラーマス」(脇口, 2018 商標登録済)



英語の文字を学習する上での困難さを考えたとき、より多くの児童が正しく英語を認識して書いたり書き写したりするための工夫の一つとして、ハイライトをつけることの有無や色の違い、児童のどのような発達段階で効果があるのか、またどのようなタイプの児童に有効であるのかを調査することは有益なことではないだろうか。

こうした工夫の効果が確認されれば、2021年度からの文部科学省「GIGAスクール構想」による学校現場へのタブレット端末の導入に係り、ハイライトの有無や色を個々の児童に適したものにしたり、四線そのものをつけたりはしざりすることが容易となり、児童が学びやすい環境を自由に選択して使用できるようになるという点において、小学校英語教育の教材として実装も期待できるものと考え。

7. まとめに代えて

令和3年1月26日に中央教育審議会が、いわゆる「令和の日本型学校教育」について答申した。ここでは、ICTの有効な活用に加え、特別な支援が必要な児童生徒に対する「個別支援」の充実や、個々の学習状況に応じた教材等によって、個別に最適な学びや支援を提供し、全ての子供たちの可能性を引き出すことが重要であるとされている。

こうしたことから、特に学校教育における外国語(英語)学習の入門期として、小学校英語教科書におけるUDの有用性をさらに研究していくことによって、どの児童も正しく英語の文字を書くことができるような指導に役立てられるとともに、引いては中学校、高等学校におけるリメディアルとしての文字指導の一助にもなると考える。

注

(1)本稿は、令和2年12月5日にオンラインで開催された第21回北海道英語教育学会研究大会で口頭発表した内容に、大幅な加筆修正を施したものである。

(2)Anne Hext 監修: Visual Stress Assessment Pack: School Edition Revised, 2014. 参考URL: <https://www.crossboweducation.com/visual-stress-assessment>

(3)「カラーマス」: 商標登録番号 5754619 (一般社団法人日本医療福祉教育コミュニケーション協会)。アルファベット用と筆算用も提案されているが、ひらがな、カタカナ、漢字用の練習帳のみ、「カラーマスノート」としてインターネット上で販売されている。

参考文献

- アレン玉井光江: 小学校英語の文字指導～リタラシ一指導の理論と実践, 東京書籍, 2019.
- 板垣静香: 英語教育におけるユニバーサルデザイン, 関西学院大学国際学研究, 9巻, 1号, 177-183, 2020.
- 大谷みどり: 英語の読み書きの指導, 発達障害事典, 日本LD学会編, 丸善出版, 186-187, 2017.
- 粕谷恭子: わかる・できる! 英語授業のひと工夫～明日から使える26事例, 光文書院, 2019.
- 兼重昇・藤井浩美・瀧本耕平・梅本龍多・小笠原剛士: 児童の「書くこと」に関する実態調査: 樟蔭学園英語教育センターフォーラム, 第9号, 1-15, 2020.
- 酒井英樹・小林比出代・滝沢雄一・伊東哲: 外国語として英語を学ぶ初学者によるアルファベットの手書き文字, JASTEC研究紀要, 37, 1-18, 2018.
- 佐藤克敏: ユニバーサルデザイン教育の目指すもの, 教育心理学年報, 第54集, 175-176, 2015.
- 佐藤慎二: 通常学級の特別支援 今日からできる! 40の提案, 日本文化科学社, 2008.
- 品川裕香: 怠けてなんかない! 3～読む・書く・記憶するのが苦手な子どもたちが英語を学ぶとき, 岩崎書店, 2020.
- 朱心茹・高田裕美・影浦映: 教科書体付属欧文の読みやすさに関する実証研究—発達性ディスレクシアを持つ読者を対象として—, デザイン学研究, Vol. 66, No. 3, 51-60, 2020.

- 竹田契一監修：学びはじめにつまずかせない！ 多感覚を生かして学ぶ小学校英語のユニバーサルデザイン，明治図書，2020.
- 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申），2021年2月9日アクセス，https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-1.pdf.
- 手島良：これからの英語の文字指導～書きやすく読みやすく～，研究社，2019.
- 花熊暁：学級全体で取り組む授業ユニバーサルデザイン～子ども一人ひとりを大切にする授業を目指して，特別支援研究，No. 652，7-10，2011.
- 平井由美子・深谷計子：学習障害とその近接領域児に対する教科教育—英語学習の指導法（1）—アルファベット習得におけるつまずきの傾向—，日本女子体育大学紀要，第29巻，91-99，1999.
- 平井由美子・石川尚子：通常学級における軽度発達障害児に対する学習支援—LDもしくはADHDが疑われる男児に対する英語学習支援—，日本女子体育大学紀要，第35巻，81-89，2005.
- 牧野留美・宮本信也：学習障害児に見られた英語学習における困難の検討—英語学習において見られた誤りから—，LD研究，第11巻，第2号，158-170，2002.
- 宮口幸治・正頭英和：1日5分！教室でできる英語コグトレ，東洋館出版社，2020.
- 村上加代子：読み書きが苦手な子どものための英単語指導ワーク，明治図書，2018.
- 村上加代子編著：目指せ！英語のユニバーサルデザイン授業，Gakken，2019.
- 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編，2017.
- 山田充：「読む・書く」の指導 基礎理論，一般財団法人特別支援教育士資格認定協会編，竹田契一・上野一彦・花熊暁監修，S.E.N.S 養成セミナー 特別支援教育の理論と実践 II—指導，第3版，金剛出版，67-80，2018.
- 湯澤正通・湯澤美紀：ワーキングメモリを生かす効果的な学習支援～学習困難な子どもの指導方法がわかる！，Gakken，2017.
- 湯澤美紀・湯澤正通・山下桂世子：ワーキングメモリと英語入門～多感覚を用いたシンセティク・フォニックスの提案，北大路書房，2017.
- 脇口明子：dyslexia 発達性読み書き障害の検討，小児科，52，345-350，2011.
- 脇口明子：学習障害，小児科，59，557-564，2018.
- 脇口明子：学習障害に対するカラーマスノートの実践，子の心とからだ [JJSP] 2020，28(4)，407-409，2020.